

幼稚園は何をするところか

津 守 真



幼稚園はいったい何をするところなのだろうか。これはたいへん率直な質問のしかたである。多くの方はこれに対して何と答えられるだろうか。こんなつきつめたことは考える必要はないと思う方もあるかもしれない。しかし、これをどのように考えるかによって、保育の実際はずいぶん異なったものになる。幼稚園とはどのようなものというイメージをもつということは、保育の実際を左右する大きな問題である。ここで最初にことわっておかなければならないが、私が幼稚園といい、保育所と言い、幼児教育と言いい、幼児保育というとき、ほとんど同じことを指している。もちろん、保育所は幼稚園と違う面をもち、幼稚園にはない機能をも担っている。しかし幼児を扱う上に、そう本質的差異があつてはならないはずである。また幼稚園は幼児を教育するところであつて、幼児を保育するところではないという論者もあるかもしれない

い。しかし、幼児の場合に、教育と保育とをそんなに判然と使いわけることができるほど、ことばの内容は分化していない。もしもそんなにはつきりと使い分ける人があるならば、それは教育を保育よりも上等なものともみ、また幼稚園に対してエリート意識が強すぎるのだろうと思う。ともかく、現在の段階で幼児教育と幼児保育ということをはつきりと使いわけることはできないと思う。いま、ここで私はあえて、「幼稚園は何をするところか」と題したのであるが、これは、保育所とは、あるいは、幼児教育とは、幼児保育とはと言ひ直しても差し支えないものであることをことわっておきたい。

さて、幼稚園は何をするところかという問題に対して、第一の答えは、幼稚園は子どもに歌や遊戯を教えたり、子どもを遊ばせたりするところだという考え方である。これは幼稚園に昔からあ

る伝統的な考え方である。子どもたちを集めて、おうたを教えるおゆうぎをさせて、いろいろのゲームを用意して遊ばせるのが幼稚園であるから、先生はうたや遊戯をたくさん知っていなければいけないし、いろいろのゲームや遊ばせ方を知っていなければならぬ。ピアノが上手にひけなければいけない。子どもたちを静粛にさせて、しかもたくみに子どもの興味をひくことが保育技術である。そのための技術としては、ピアノに合わせて静かに立ったり坐ったりすることや、身ぶりや顔の表情で子どもを制することを使いこなさなければならぬ。それは経験からわり出されるものでもあつて、こうして得たコツは保育技術の中でもっとも重要なものである。歌や遊戯だけでなく、おはなしもまた同様である。おもしろいおはなしができることが先生になるために学ばなければならぬことであり、話術の研究が保育技術となる。ともかく、幼稚園に子どもが集まったら、みんなで集まって、歌をうたつて、遊戯をして、おはなしをして、それからみんなで何かをつくつて、…というようなことをくりかえしてゆくことが幼稚園であるという考え方である。こういう考え方に立つと、幼稚園としてせねばならぬことは、どうやって新しい歌や遊戯の材料、おはなしや製作の材料をしいれるかということであり、どうやってこれだけのプログラムを子どもの中にもおもしろく入れていくかという技術を工夫することであり、いかにして子どもを静粛にさ

せるかという技術を考え出すことである。こういう考え方でゆくりかえしが多くなり、幼稚園の実際はそれ以上発展しないだろう。またこのような技術の研究は、近代的学問や技術の対象ともならず、優秀な人材を保育界に集めることもできなくなつてしまふであらう。昔ながらのちーちーばっばの先生にとどまつてしまふであらう。

このような伝統的な幼児保育の考え方に対して、幼稚園は幼児を教育し、幼いうちから正しいしつけをする場所であるという考え方がある。幼児のうちから正しい習慣をつけることはたいせつであつて、善悪のけじめも小さいときからはっきりさせておかなければいけない。子どものときに自由を与えすぎるから不良少年にもなるのであつて、小さいうちからしっかりつけておかなければいけないという考え方である。このような考えに立つときには、幼稚園は子どもが遊ぶ場所ではなくて、訓練される場所である。だから、みんなで集まって、たとえおもしろいおはなしでなくても、がまんして静粛にすることが必要である。めいわくをかける行動は禁止され、しつけられなければならない。秩序を保つことは幼稚園のなすべきもつとも重要なことである。これはたいへん素朴な考え方である。形式論的な考え方である。しかしここでは、およそ、子どもの内面生活のことは考えられていない。子ど

もの気持に対する配慮を欠いている。このような形式論はおとなの論理であって、子どもの論理ではない。子どもにはおとなの自分勝手とうつるだけであって、こうして教育された子どもは、自己中心的な自分勝手な人間になるであらう。他人に対する思いやりや配慮を欠いて、しかも権威的な人間をつくっていくであらう。しかしこの考えは素ぼくなだけに、一般社会人にうけいれられやすい。また子どもをもった経験のない人やその他、権威主義的世界観をもった人はこうした幼稚園観をもちやすい。

幼稚園は何をするところかという問に対して、私は前二者の考え方の何れをもとらないのである。私もはまず幼児の現実の姿に眼をむけなければならない。幼児のありのままをみ、それをひとりの人間として接するところから出発する。そのとき、幼児には幼児としての考え方や特性があることを発見する。その幼児が、日々、充実して生き甲斐のある生活を送るようにすることがたいせつである。幼児が満足した生活をしているときに、幼児は最善の発達をする。それではどのようにしたら、幼児に満足のゆく充実した生活を送らせることができるのか、これを考えることが保育技術であり、幼稚園が研究し工夫せねばならぬところである。そのときには、もはや、歌を歌っても歌を覚えること自体は幼児保育の課題ではなくなってくる。同様にして、遊戯をすることも、たんに多くの遊戯を正しくできるところに意味があ

るのではないし、おもしろいおはなしを静粛にきくようになるところに幼稚園としての意義があるのでない。製作も製作品をつくることに意味があるのでない。そこで子どもがどのようにして力を発揮するか、どれだけ考え、工夫し、友人の中で生き、幼児なりの全能力を出して生きていくかということが重要なのである。こうして幼児期に充実した生活を送ることができるならば、それは将来に対しても最善の地盤を用意しているのである。幼児期は、おとなになってからの精神衛生にも、不良化予防のためにも重要な段階であり、その観点からも幼児期の教育はきわめて重要である。そのためには、幼児期に幼児なりに満足した生活を送らせることが必要なのである。

いろいろな主義、宗教やイデオロギーなどが幼児保育の中には入ってくることもあらう。けれども幼児にまず充実した満足のゆく生活を保証することこそたいせつなのである。その配慮を欠いたところでは、どんなに立派な施設があり、どんなに立派な主義があっても、幼児教育がなされているとは言えないのである。

今回は、保育に対する三つの考え方を並列して示した。それではどのような根拠があつて、この第三の観点は他の二者に対してすぐれていると断定できるのか。またそれは実際にはどのように展開されるのか。このような点について、次回から論じてゆきたいと思う。